

イギリスの地方大学における留学生サービスの現状について

ロンドン研究連絡センター

山口昌志

イギリスの地方大学における留学生サービスの現状について

序) イギリスの大学における留学生の状況¹

イギリスの大学においては、イギリス出身の学生に対する学費と、留学生から徴収する学費とが大きく異なっている。

UK Council for International Student Affairsによれば、EU圏外からの留学生に対する学費は、それぞれの大学が、3,500 ポンド（約 77 万円）から 18,000 ポンド（約 396 万円）の間で設定できる²。例えば、イギリス南部のブライトン大学においては、2007 年度、イギリスならびにEU出身の学部学生への学費は年間 3,070 ポンド（約 68 万円）であるのに対し、EU圏外の留学生は 8,000 ポンド（約 176 万円）、あるいは研究を中心とする理系学生は 9,350 ポンド（約 206 万円）にもなる³。また学費以外にも地元出身の学生に較べて留学生は、母国との往復、通信、生活基盤の確保等で経済的な負担は大きいはずである。

留学生数推移	
年度	留学生総数
1999/00	224,660
2000/01	230,870
2001/02	242,755
2002/03	275,265
2003/04	300,050
2004/05	318,400
2005/06	330,080

(HESA Student Table より)

それにも関わらず、イギリスへ留学する学生は年々増加してきて、高等教育統計局（Higher Education Statistics Agency。以下HESA）の集計によれば、2005-2006 年の留学生数は 33 万人を超え、うち 22 万人弱が、学費が割高となるEU以外からの留学生である⁴。

イギリス出身の学生と較べると学費は倍以上であり、右の出身国表を見ると分るように、アジアとアフリカからの留学生も多く、経済的に裕福な学生ばかりが集まっているとは考えにくい。

留学生を引き付けている理由としては、「平成 17 年度日本学術振興会国際学術交流海外実務研修報告書」において二村

肇氏がまとめているように、イギリスの大学における充実した教育課程や資金援助制度、課程修了後の滞在延長、柔軟な入学制度、短期間での博士号取得などがあげられる（97-99 頁）。また、好調なイギリス経済や、そもそも現代世界の英語文化の中心である点など、イギリス自体に、学生を引き付ける要因は多いと考えられる。

こういう状況において、大学はどのように留学生に接しているのか。前述の二村氏のまとめによれば、留学生から徴収する学費は、大学の総収入の中でも高い割合を示している。例えば、イギリスの中でも特に留学生数の多いCambridge 大学では総収入の約 5%が留学生から徴収する学費であるが、Warwick 大学の場合は約 13%、London School of Economics and Political Scienceでは約 33%が、留学生か

イギリス内の留学生数(2005/06 年)	
留学生合計	330080
EU 出身学生(除イギリス)	106225
非 EU 出身留学生	219175
その他ヨーロッパ	7785
アフリカ	30985
アジア	134665
オセアニア	2295
中東	14265
北米	24000
南米	4145
その他	1035

HESA STUDENTS in higher Education
Institutions 2005/06 (16 頁)より

らの学費となっている（前出 100 頁）。いずれの大学も、大学の外から獲得する研究資金が少ないわけではない⁵。それにもかかわらず留学生から徴収する学費の割合が高いのであり、留学生から得られる収入が、大学収入の大きな柱になっていることがうかがわれる。

そうであるなら、イギリスの大学における留学生サービスは、質の高いものであることが想像される。現に、ブライトン大学の留学生担当者は、「イギリスの学生に較べて格段に高い学費を支払っている学生には、しっかりした学生サービスを提供しなければならない」と語っていた⁶。日本の大学も参考にすべき点が多いに違いない。

本レポートは、こうした現状にあるイギリスの大学の留学生サービスの実態を、二つの大学の事例を紹介しながら記して行く。日本の大学における留学生サービスのあり方を検討する際の資料のひとつになればと思う。

1) ブライトン大学における留学生サービス

A) ブライトン大学概要

ブライトンは、ロンドンの約 80 キロ南に位置する海辺のリゾート都市で、ロンドンからは電車で 1 時間程度で行ける。もとは小さな漁村だったが、1700 年代から海水を利用した薬餌療法、入浴療法が始まり、その後、王室関係者が滞在するなど、ロンドンから最も近い、海沿いの保養地として急速に発達した。

ブライトン大学は、1992 年に専門学校 (polytechnic) から大学(university)に昇格した新しい大学であるが、もともとは 1859 年にロイヤル・パビリオン内に設立された美術学校と、1897 年に設立された公立の科学技術学校がもとになっている。1992 年に大学に昇格した多くの専門学校の中では、ブライトン大学の評判はかなり高い。2007 年度の The Times Good University Guide 2007・Top Universities 2007 League Table によると、全英 139 大学のうちで 59 位。学部別では、Art&Design が全英の大学で 5 位に入るなど、高い評価を受けている。学生数は、20,968 名で、留学生数は 2,700 名余（うち EU 外の留学生は 1300 名余）である (HESA Check Documentation 2005/06)。なお、1992 年の大学改革では、一度に 30 の専門学校が大学に昇格している。



ブライトン大学

B) 留学生の生活費

ブリティッシュ・カウンシルによれば、留学生が一般的に必要な生活費は、学費を除き、一ヶ月 650 ポンド(約 143,000 円)から 750 ポンド(約 165,000 円)である⁷。その中では住居費の割合がもっとも高いと考えられるが、ブライトン大学では、期限（通常の 9 月入学では 6 月 15 日）までに申請した留学生は必ず、学生寮に入居できるよう計らわれている。

月額家賃は部屋の種類や食事の有無にもよって異なるが、見学した Moulsecocomb Place の

場合、食事つき(授業期間中の平日、朝晩のみ)で 39 週 4,384 ポンド(約 96 万円)、一週間にすると約 112 ポンド(約 25,000 円)。食事なしのもっとも安い寮では 2,466 ポンド(39 週)、週当たり 63 ポンド程度(約 14,000 円)である。なお入居に際しては 300 ポンド(約 66,000 円)のデポジットが必要で、家賃に光熱水料は含まれている(インターネット費用は別)。



標準的な学生寮の一室

日本と較べると学生寮の家賃はかなり高い⁸。過去には、英国も日本のように割安な学生寮が提供されていたとのことだが、大学も収入を増やす必要があり、年々寮費を値上げしているとのことである。このため、担当者によれば、渡英後に割安な民間アパート等を探すと決めて、学生寮入居を申請しない留学生も少なくないとのことである。ブライトンの民間アパートの家賃は、平均で週 70 ポンド程度(15,400 円)であり、学生寮の家賃と大きく乖離しているわけではない。



寮の廊下。ホテルのような構造

大学の学生寮は、大学に近いという立地条件と必要な設備を完備していることを売りに、民間住宅並みの高い家賃設定をしていると言える。生活は基本的に快適であり、全体的に清潔感があるように感じたが、頻繁に騒音問題が起きるとのことであった。

学生寮は、基本的に 6 から 8 室が台所と風呂場、トイレを共有するルーム・シェアで、寮生は、建物の入口とシェア・ルームへの扉、それから自室扉の鍵を渡される。セキュリティは高い。

ほかに日本と異なるように感じたのは、洗濯機が少ない点で、洗濯場は各棟に一箇所しかなかった。担当者は、学生はあまり洗濯をしないと言っていたが、コイン式なので、自分で洗っているのかもしれない。一回につき 1.6 ポンド(約 350 円) 必要である。

清掃は廊下や台所など、共用部分に週に一度。トイレや風呂にはもう一度、清掃が入るとのこと。なお共用の台所は、日本の学生寮と同様、きれいとは言いがたい。

留学生は、授業期間中は週に 20 時間、授業期間以外は無制限のアルバイトが認められているが、大学としては、授業料や必要な生活費のためにアルバイトをすることを勧めていない(というより、学生ビザ取得のためには、学生生活に必要なだけの金銭を確保していることが必要である)。小遣い稼ぎや、英国での勤労経験を目的に、大学の学生会(Students Union)が斡旋している。

奨学金については、前出の二村氏の調査によると、「資金援助を受ける機会が多いのも英国の特徴」とあり、ケンブリッジ大学の各カレッジの持つ豊富な奨学金について記されているが⁹、ブライトン大学の担当者によれば、ブライトン大学に在籍する留学生のうち、奨学金を獲得しているのは 10%程度に過ぎず、大半は、すべて自己負担で数年の留学期間を過ごしている。ただ、そういう留学生のために金銭面でのアドバイスをする担当が決まっており(Money Doctorとも呼ばれている)、学生の毎月の支出を細かく分析したり、ブリティッシュ・カウン

シルのデータベースから申請資格に適合する奨学金プログラムを見つけたりするサービスを提供している。

そのほかには、留学生は学費を期日までに一括で支払うと学費全体が5%割引になり、また年間およそ80名の留学生が授業料免除を受けられ¹⁰、またイギリスのインフレ率に合わせて年々少しずつ上昇する学費も、留学生は入学年の設定額が卒業時まで維持される、などの優遇措置はあるが、全体的に、留学生への金銭的な援助は日本に較べると薄い感じを受けた。経済効果が優先され、高価な学費・寮費に見合うだけの質の高いサービスを提供するという基本姿勢である。

C) 大学生生活

留学生は最初に、3日間に渡るオリエンテーションを受けることができる。また、オリエンテーションの初日にヒースロー、ガトウィック空港に到着する留学生は、無料で大学まで連れて来てもらえる（その他の空港、その他の日に到着する場合は自分で移動）。オリエンテーション開催中の3日間は、無料で学生寮に滞在できる。いずれも事前登録が必要だが、留学初期の、もっとも不安な時にこのサービスが受けられるのは、非常にありがたいと思われた（ただしその後はすべて有料である）。

オリエンテーションにおいて、大学生生活の説明はもちろん、各国の留学生コミュニティや、民間アパートの情報などが紹介される。グループをつくり、1年もしくは2年先輩の留学生がリーダーとなって、後輩たちから質問を受けつつ、様々なアドバイスをするとのことである。

また一般学生の中から選出される、**Students Ambassador** も紹介される。彼らは、留学生が到着する最初の一週間に限り、大学内のあちこちに立って道案内をしたり、留学生からの質問に答えたりする。毎年35名程度が選ばれ、一目でそれと分るようなTシャツが配布される。時給は6ポンド(約1200円)で、学外アルバイトの時給とそれほど変わらない。

チューター制度もあるが、ブライトン大学では若手教員がその任についており、留学生、一般学生を含めた数名から十数名の担当学生の学業について、相談に乗っている。若手教員の勤務条件に、学生のチューターになる旨が明記されているそうである。

留学生の生活面でのサポートには、学生会(**Students Union**)が力になることもあるが、多くの場合、留学生は困ったことがあれば自国の留学生グループに相談しているようである。学生会は職員が3名のみで、留学生も一般学生も区別していない。学生会の主な役割は「学生の味方になる」ということで、1名は住宅面でのサポートを、残り2名が、学生にカンニング等の疑惑がかけられた際、弁護に回るそうである。



学生会は、大学事務局とは別の組織

なお大学内のカフェテリアは、昼食だけを提供するところもあれば、三食提供しているところもある(平日のみ)。また、学内にカフェもあるし、学生会が運営する店もある。昼食代は、例えば、ハンバーガーとポテト、ミネラルウォーターで

3.5 ポンド程度(約 770 円)である。自炊する学生も多い。

D) その他留学生サービス

留学生のビザ延長時には、大学のサポートを受けられる。大学からまとめて入国管理局に申請するとのことで、そのことを専門に扱う Immigration Solicitor (入国管理局申請取次行政書士) が事務局に在籍している。提出した申請書類が不許可になることは珍しくないようで、そうした際には、Immigration Solicitor が個別に相談し、書類の書き直しなどを指示する。留学生のビザ延長申請が最終的に却下され、その留学生が帰国する必要に迫られた事例はこれまでに無いそうである。入国管理局には、大学からの申請をまとめて受理する窓口があるようで、そこへ申請すると、個別の申請書についての質問にも対応してもらえるため、個別申請より有用であるとのことである。

ただ、留学生がビザ延長時にもっとも苦しむのは高い更新手数料であり、郵送の場合は 295 ポンド (約 65,000 円)、窓口申請の場合 500 ポンド (約 11 万円) にもなる¹¹。

留学生のために企画されるイベントは、年間に 20 回程度あり、そのうち大きなイベントは 2,3 回である。イベントには無料のものも、有料のものもあるが、有料のイベントでも格安の料金を設定している (例えば毎年秋に開催する Thanksgiving Dinner Party では、メインとデザート の 2 コース料理が 3 ポンド(約 660 円)で食べられる)。

また、留学生のための見学旅行として安価な旅行も計画されており、毎年スタッフが地元の旅行会社と相談して行先や旅行プランを決める。訪問した時には、3 月のアムステルダム旅行が計画中だった。



留学生サービス担当課 (建物外観)

英国から他国への旅行が認められないビザ資格で来ている留学生も多く(中国やインド)、そういった留学生のために、この見学旅行を理由にして、ビザの条件を変更するサービスも行っている。この複数入国ビザは、一度取得すれば、その後何度でも利用できるため、留学生には好評であるようだ。

3 月のアムステルダム旅行は、2 泊 3 日で、交通費と宿泊費と朝食、それから同行する観光ガイドの費用を含み 79 ポンド(17,400 円程度)で計画中とのことだった。3 食すべて提供するわけではなく、自由時間も多いうのである。

大学には、そのほかに緊急貸付金制度があり、留学生だけでなく一般学生も利用することができる(主として一般学生が利用するようだ)。これは、4 週間を限度に、週 50 ポンド(約 1 万円超)を無利子で貸し付ける制度で、「本当に、ただ、飢え死にさせないため」に儲けられている。両親がすぐに返済する、あるいは自分のアルバイトの給料日が来週である、など、確実に返済できることを証明して借りる。返済できない場合は、大学のいっさいのサービス提供が停止され、返済が完了するまで卒業もできないそうである。

なお、留学生サービスを専門に行う事務局職員は全部で 4 名。アメリカ人が一人いたが、あ

とは現地人だった。スタッフの多くは複数の言語を喋ることができ、日系人のスタッフもいた。他に、留学生、一般学生を区別しない学生サービス全般を担当する部署もある。

ブライトン大学は、学生にアパートを提供する家主のためにガイドブックを作成している。入居学生を国籍や性別などで差別してはいけないことや、大学の提供するオンラインデータベースへの登録方法、家賃設定、学生アパート賃貸に関連したよくある質問事項などが記載されている。担当者によると、ブライトンの民間アパートは需要に対して供給がやや多いようで、大学のデータベースに掲載するメリットは大きいとのことである。大学側は、データベースに掲載する場合の家賃の上限を設定するなど、家主、入居学生の双方の便宜を計っている。

2) ノッティンガム・トレント大学における留学生サービス

英国の大学における留学生サービスの状況は、基本的に、上記ブライトン大学の様子と大差ないそうである。ブライトン大学の留学生サービスの担当者は、過去に2つの大学の事務局に勤めていたことがあるそうで、自身の大学生生活とブライトンでの勤務を合わせると4箇所の留学生サービスを見てきたことになる。そして、すべての大学で類似したサービスを提供しているが、ブライトン大学の留学生サービスがもっとも親切であたたかい、ということ話を話していた。

ここでもう一箇所、英国中部ノッティンガムにある、ノッティンガム・トレント大学における留学生サービスの現状を紹介し、また何人かの留学生から直接話を聞いた点も合わせて、比較材料としたい。

A) ノッティンガム・トレント大学概要

ノッティンガムはイングランド中部の中規模都市で、それほど特色のある都市とは言いがたいが、ロビン・フッド伝説の中心地であり、全体的におだやかな町である。ノッティンガム大学とノッティンガム・トレント大学という二つの総合大学があり、非常に学生が多い街である。

そのうちのノッティンガム・トレント大学は、ブライトン大学と同様、1992年に大学に昇格した新しい大学であり、ブライトン大学ほど高い評価を受けているとはいえないが、卒業生にデザイナーのポール・スミスがいるなど、美術や服飾デザイン系の学部が世界的に有名である。英国随一の25,000人の学生が在籍し、そのうちの7%、1800人程度がEU外からの留学生である。留学生数は他の大学に較べて決して多くないが、多くない点を逆にして中国人留学生などの募集を行っているそうである¹²。



高い評価を受ける服飾デザイン系の学部

B) 留学生の金銭状況

ノッティンガム・トレント大学（以下NTU）でも留学生とイギリス・EU学生とでは学費が異なり、留学生の場合 8,000 から 10,000 ポンド（176 万～220 万円）である。ブライトン大学と異なり、年々のインフレ率に合わせて、学費は毎年改定される。

奨学金制度も充実しているとは言えず、留学生の 9 割は全額を自費で学習している。留学生の学費の一部を補助する制度はあるが、適用されるのは全体の 5% の 90 名に過ぎない。インドや中国の留学生の場合、家族や親戚から金を集めそれで渡航してくる場合が多いようだが、アラブ諸国からの留学生は、政府からの奨学金を受けている場合が多い。なお 2008 年から、インドからの、生物化学系の大学院学生 1 名に対し、学費全額支給の奨学金制度が始まるとのことである。

ノッティンガムの都市自体、イギリスの他の都市と比べて物価が安いようだが、それでも多くの留学生はアルバイトを行っているとのことである。NTUでも学費や生活費のためのアルバイトは推奨しておらず、大学としてはアルバイトをするなら、小遣いやアルバイト体験目的に 10 時間までにするよう勧めている。

ただ、話を聞いた学生によれば、授業数が多く、課される宿題も多いため、そもそも授業期間中にアルバイトをする余裕は無いとのことである。話を聞いた留学生は全員、外食を控えた自炊中心の生活を送っており、その分、ハロウィンなど、口実を設けて開催されるパーティでは大いに盛り上がるようとするそうである。

学生寮は、ブライトンと同様、期日までに申請すれば、最初の 1 年間について入居が確約される。民間のアパートも多く存在し、自分のアパートを満室にできる家主は多くないとのことである。このため、特に大学側が家賃設定をしなくても、ある程度低い水準で、民間アパートの家賃は設定されるようだ。

大学の学生寮では、光熱水料込みで週 80 ポンド程度（17,600 円）、民間アパートでは光熱水料別で、45 から 70 ポンド（10,000～15,000 円）が相場である。2 年目以降の学生は民間アパートでルーム・シェアをするのが一般的で、アパートもルーム・シェア用に設計されているものが多い。最も安価な方法ではあるが、セキュリティや騒音問題などがあり、苦勞する学生も多い¹³。



学生寮外観。中はブライトン大学のものと同様

C) 大学生生活

NTUに新たに入学する留学生は、最初に、留学生オリエンテーションへ参加することを勧められる。ブライトン大学と同様、ヒースロー空港もしくはマンチェスター空港に当日あるいは前日到着する留学生は、ピックアップ・サービスを受けられるが、宿泊施設の無料提供は無い。ただ、最初に一年間の学生宿舎への滞在を希望する際に、オリエンテーション期間を含むかたちで申請することは可能である。オリエンテーション期間中には、ブライトン大学にお

ける Students Ambassador と同様に、The Orientation Student Assistants' Team が色々なサポートを行う。

NTU では、基本的に留学生にも一般学生にも同様の学生サービスを提供するという基本姿勢とのことであるが、週に一度、留学生のために ME (Meet and Eat) Time Lunch が開催されている。ME Time Lunch は、大学事務局の留学生サービス部門と、大学牧師(University's chaplains) とが共催し、留学生に安くて健康的な昼食を提供するとともに、留学生同士の交流を促進したり、様々な相談ごとに応じている。もっとも、インタビューをした留学生の大半は、その会場が離れていることもあって、昼食会に参加したことが無いそうである（制度自体を知らないという留学生もいた）。

学生会(Student Union)の活動は、学生数が多いこともあり、ブライトン大学のものより活発であるように感じた。ブライトン大学とほぼ同様のサービスが受けられるが、学生会の運営するバーがあり、昼間からビールが飲めるなど、やや混沌とした雰囲気を持っているように感じられた。

NTU の留学生サービス・国際交流・リクルート部門には全部で 12 名のスタッフが常勤していて、それぞれの仕事を進めつつ、留学生から個別の相談に応じている。留学生の出身国・地域ごとに担当者が決まっており、留学生は予約をすればいつでもそのスタッフに面談できる。インタビューした学生によれば、留学生サービスのスタッフは親切で、日常生活からビザの問題、金銭問題など何でも相談できるそうである。



Student Union の内部

学業上の問題については、ブライトン大学と同様、担当のチューター教員に相談できるようだが、インタビューした留学生は、担当チューターの名前を覚えていないくらい、ほとんど利用していないようだった。

ビザ延長や家族のためのビザ申請などに大学事務局のサポートが受けられるし、また留学生のための見学旅行も開催される。このあたりは、どの大学でも共通しているようだ。なお、留学生のビザ状況を大学側が管理することは法律で義務付けられているそうである。

3) まとめ

調査した 2 つの大学は、数多いイギリスの大学の中では、比較的、留学生の受入数が少ない大学であるが、学生獲得のため、スタッフを海外へ積極的に派遣するなど、新規の留学生獲得に力を入れていた。

また双方の大学ともにデザイン系の学部があるためかもしれないが、留学生に配布しているパンフレット類のデザインが、非常にすぐれたものであるようにも感じられた。どちらもカラー刷りで、重要な情報が簡単に得られるよう配慮してあった。ブライトン大学の場合はパンフレットが情報ごとに分けられており、必要な情報を取り出しやすい。



2つの大学の配布資料（下がブライトン）

NTUには日本語ガイドもある

また、どちらの大学にも、**chaplains**（牧師）が所属して、キリスト教だけでなく、あらゆる宗教に関する相談に応じられる点は、世界中から留学生を集めようとする際に非常に大きなメリットになるように感じられた。ほかにも宗教に関する相談に応じる宗教アドバイザーが設置されているなど、各文化の宗教に対して非常に理解が深いように感じられた。

ただいずれにしても、留学生が支払う学費は高額で、留学生の確保は大学の資金獲得手段の一つに位置づけられているようだが、その割に、留学生へ提供できるサービスは決して多いとは言えないように感じられた。留学生が一般学生の二倍以上の学費を払っているからといって、二倍以上、留学生を優遇するようなサポートをしているわけではなかった。

しかし、その中で、留学生が必要としているかを的確に把握し、限られた予算でも行えるサポートをうまく選択して実行しているように感じられた。インタビューをした留学生も、現在の学生サービスに不満を感じているという話はしていなかった。

日本の大学においても、留学生が何を必要としているかを的確に把握し、不要と判断できるサービスを省くと同時に、必要なサービスをいっそう手厚く行えば、留学生の満足度も上昇し、優秀な学生の確保が達成されるのではないかと感じられた。経済的な支援があればいっそう多くの優秀な留学生が集まるだろうが、今回の調査を通じて、高い学費負担があっても質の高い留学生を確保することは可能であると感じた。

付) ブライトン大学の卒業式について

7月25日に、招待されたセンター長に随伴し、ブライトン大学の卒業式を見学した。大学の卒業式は、大学の行事の中でも最も重要な学生サービスのひとつと位置づけられており¹⁴、日本の大学における卒業式とも大きく運営方法や式次第が異なるように感じられたため、参考までに以下に、見学した式の状況を記述する。

A) 卒業式式次第

卒業式は、7月24日(火)から27日(金)まで毎日、午前10時15分からと午後3時15分からの二回に分けて、合計で8回、学部ごとに別れて、同一場所(ブライトン・ドーム)で開催される。そして毎回、それぞれ異なったガウンを着用した理事会の全員と全学部長、学長が壇上へ勢ぞろいする¹⁵。



卒業式会場の様子

式次第は簡単である。

1. 入場行進(学系評議員(学部長かと思われる)、教授、事務長、来賓、理事会員、地域代表、名誉卒業生(名誉博士号受賞者)、学長、理事長)
(このとき観客は全員起立する)

2. 学長挨拶

3. 学部長による卒業生紹介

一人一人の名前が読み上げられるとともに、上手から一人一人が登場し、壇上中央において学長または理事長と握手をし、下手で証書を受け取り、壇から降りる。名前を読み上げられた際、観客は拍手し、人によっては観客から声がかかる。歓声は家族からか、友人からだと思われる。また、名前のあとに在学中の受賞歴についても紹介され人もある。全卒業生が済むまで名前の読み上げ、観客の拍手、壇上での握手は延々と続く。

4. 名誉学位授与

式のちょうど半ばで、名誉学位の授与と、受賞者の講演がある。4日間8回の式で毎回別の人に授与される。2007年度は、もと留学生で、現在マレーシアで第一位の民間企業社長や、米国タフツ大学学長ら、合計9名に、名誉博士号等学位が授与された。1992年に大学へ昇格した新しい大学でも、積極的に名誉博士号を授与しているのは、意外であった。

5. 次の学部の卒業生紹介

先ほどと同様に進行する。

6. 優秀な教職員表彰

大学内の全教職員の中から、教職員と学生からの推薦（投票）により、優秀な教職員が選ばれ、表彰される。今年は、大学の全教職員から 16 名が選出された。教授から若手事務員まで、幅広い教職員が表彰された。表彰は、学長から賞状が授与されるだけで、特段スピーチは挟まれなかった。

7. 退場

入場行進と同様、観客は起立をして見送る。

B) 卒業式参加費について¹⁶

例年、4月中旬に卒業式への出席／欠席の回答をすることになっている。そのときに、証書に記入される正式な名前の確認も行う。なお、卒業の可否が最終決定されるのは7月初旬であり、もしこのときに卒業できないことが判明した場合、当然、式への出席はできない。

出席登録をする際、2名まで家族等ゲストの出席も登録できるが、その際、一人 12 ポンドのチケットを購入する必要がある。ゲスト用のチケットは、後日、学生課のホームページなどで、追加購入可能の告知がされることがある。12 ポンド（およそ 2,600 円）のゲスト・チケットは基本的に払い戻しできないが、卒業できない学生のゲスト・チケットは、例外である。

卒業生には、ガウンを着用することが奨励されている。強制されるものではないが、式中にガウンを着用していなかったのは数名程度であった。ただしガウンは、有料である。購入もしくはレンタルすることが可能で、購入した場合、学部生はガウン 149.00 ポンド（およそ 3 万 5,000 円）、帽子 31.00 ポンド（およそ 7,200 円）。修士は専門によって異なるが、一般にガウン 189.00 ポンド、フード 82.00 ポンド、帽子 31.00 ポンドである。また、博士になると、ガウン 385.00 ポンド（およそ 8 万 9,000 円）、フード 117.00 ポンド、帽子 69.00 ポンドになる。レンタルした場合、学部生は一式で 32.00 ポンド（およそ 7,400 円）、修士は 33.00 ポンド、博士は 35.00 ポンドとなっている。決して安価ではないが、ほぼ全員が着用していた。

-
- 1 日本円計算は、1 ポンド 220 円で計算し、端数などは適宜四捨五入した。
 - 2 “Tuition fees: will I pay the ‘home’ or ‘overseas’ rate for study in Scotland?” UKCISA INFORMATION SHEETS FOR STUDENTS, December 2007 (http://www.ukcosa.org.uk/files/pdf/info_sheets/tuition_fees_scotland.pdf)
 - 3 Fees and funding 2007, Student life, University of Brighton (<http://www.brighton.ac.uk/studentlife/money/2007entry/index.php?PageId=1910>)
 - 4 HESA STUDENTS in higher Education Institutions 2005/06 (16 頁)
 - 5 2007 年 10 月 30 日に Guardian 紙が発表した、イギリスの全 139 大学の 2002 年から 2006 年にかけての研究資金獲得額状況によれば、Cambridge 大学の資金獲得額は全英 3 位。また Warwick 大学は全英 26 位であり、London School of Economics and Political Science は 51 位である。
 - 6 以下、引用を明記しない場合は、Jennifer Montague, Project Coordinator (International Students), Student Services, University of Brighton に対するインタビュー結果より (2007 年 11 月 29 日訪問調査)。
 - 7 「予算の管理」 British Council Japan, (<http://www.britishcouncil.org/jp/japan-educationuk-managing-finances.htm>)
 - 8 例えば豊橋技術科学大学の留学生宿舍家賃は、光熱水料は別だが、一ヶ月 5,900 円 (約 27 ポンド) である。
 - 9 二村肇『英国と日本の留学生交流の現状及び課題』「平成 17 年度日本学術振興会国際学術交流海外実務研修報告書」97 頁。
 - 10 毎年 75 名超が 2,000 ポンドの授業料減免、4 名が半額免除されている。
 - 11 Cost of applying, Border & Immigration Agency (<http://www.bia.homeoffice.gov.uk/ukresidency/cost/>)
 - 12 以下、引用を明記しない場合は、Rachel Bilson, International Recruitment Officer, Nottingham Trent University に対するインタビュー結果より (2008 年 2 月 1 日訪問調査)。
 - 13 現にインタビューをした韓国人学生は、同じ韓国人学生のルーム・メイト弾く楽器に耐えられず、引越しを余儀なくされた。
 - 14 7 月 25 日の卒業式に臨席した Ranke Adenle MA (RCA), Business Development Manager, Cultural and Creative Industries から聞いた話。保護者の出席も多く、配布されるパンフレット等もきわめて立派で、大学の宣伝になることは間違なさそうであった。
 - 15 写真転載元は、“Award Ceremonies, About Us, University of Brighton” (<http://www.brighton.ac.uk/news/awardceremonies.php?PageId=802>)
 - 16 “Award ceremony information Summer 2007” Ceremony Administration, Registry, University of Brighton 発行を参照した。この資料は卒業式に先立ち、3 月ごろ、対象者に配布される (最新版はインターネットでも入手可能。注 15 と同一アドレス)。